

# 家族関係の構築と人間の成長を促すためには昔の日本家屋を学ぶべき

かつて子どもがそれぞれ個室を持つことは日本の家族にとって一つの目標だった。しかし十分な個室を与えられなかった子どもが結果として残忍な事件をたびたび起こす。その要因として、家族関係とともに間取りのあり方も問われている。犯罪者の間取りに関する著作もある建築家の横山彰人氏に話を聞いた。

## 間取りは奥深い

横山さんの間取りに関する著作では、家族関係や人間の成長をテーマにするものが多いですね。なかでも「子どもをゆがませる間取り」を読むと、人間形成に影響を及ぼしたであろう間取りが存在したのだと改めて思います。

間取りとは実に奥深い世界です。家づくりにおいて間取りとは非常に重要な位置を占めますが、そこに配慮しただけで済んで家族問題などがすべて解決する訳ではありません。

また、家族とコミュニケーションがとりづらいう「危ない間取り」に住んでいる人がみな犯罪者になってしまう訳でもありません。普通に成長し、大人になる人もいます。

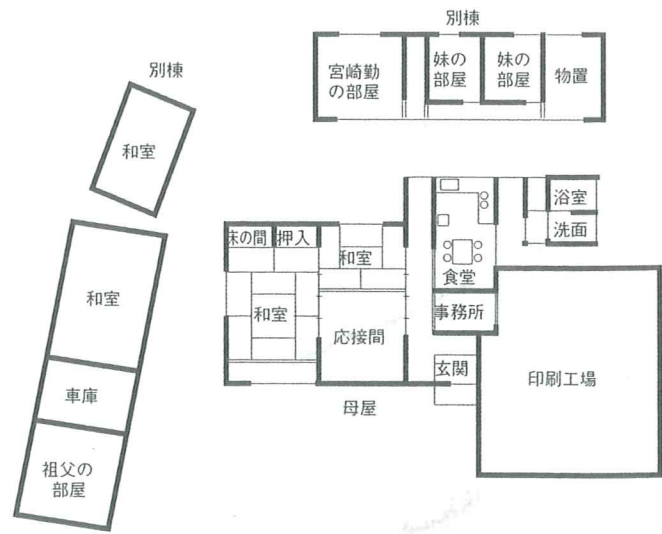
拙著「子どもをゆがませる間取り」(情報センター出版局)では、具体的な事例として「宮崎勤・連続少女誘拐殺人事件」、「金属バット両親殺害事件」、「女子高生コンクリート詰め殺人事件」、「酒鬼薔薇・神戸連続児童殺傷事件」、「新潟少女監禁事件」などを取り上げました。



横山彰人氏  
横山彰人建築設計事務所

## 【プロフィール】

1949年山形県生まれ。日本大学理工学部建築学科卒。1979年横山彰人建築設計事務所を設立。間取りが子どもや家族関係に与える影響についていち早く警鐘を鳴らしてきた。著書に「住まいに居場所がありますか?」(ちくま新書)、「夫婦をゆがめる間取り」(PHPエディターズ・グループ)、「危ない間取り」(新潮社)など。



宮崎勤が育った家の間取り。もともとは田の字型の典型的な日本家屋の間取りだったが増改築が繰り返された。母屋の印刷工場、祖父の部屋があった別棟、子ども部屋があった別棟は、それぞれ時期を別に増築された部分。宮崎勤の部屋は母屋から完全に分かれており、この部屋に大量のビデオテープが置かれていた。

出典：「子供をゆがませる間取り」(情報センター出版局) (以下同じ)

何度か増改築がなされており、1度目は母屋を大幅に増築し印刷工場と事務所をつくりました。

そして3度目の増築で建てられた別棟には、宮崎をはじめとする兄弟・姉妹がそれぞれ個室を与えられました。

この部屋で宮崎は6000本近くのビデオテープをため込み、かつ殺害した少女の遺体も運びこんでいたことが後に判明します。

母屋は仕事場が中心。祖父の部屋も離れにあり、子ども部屋も別棟。家族の関係は分断され、その解離性が助長されるような配置でした。

## 高級建売住宅で起った金属バット殺害事件

「金属バット両親殺害事件」も世間を騒がせました。「金属バット両親殺害事件」(1980年)は当時浪人を重ねていた男子学生

りません。

また、家族とコミュニケーションがとりづらいう「危ない間取り」に住んでいる人がみな犯罪者になってしまう訳でもありません。普通に成長し、大人になる人もいます。

拙著「子どもをゆがませる間取り」(情報センター出版局)では、具体的な事例として「宮崎勤・連続少女誘拐殺人事件」、「金属バット両親殺害事件」、「女子高生コンクリート詰め殺人事件」、「酒鬼薔薇・神戸連続児童殺傷事件」、「新潟少女監禁事件」などを取り上げました。

が両親を金属バットで殴って殺害した事件です。父親は東大卒のエリートサラリーマンで母親も短大卒。彼の兄もまた有名私立大学を卒業して一流企業に就職していました。

この一家が川崎市にあった新築建売住宅に移り住んだのは次男が高校に入学した時です。

彼が事件を引き起こす1年ほど前、父親は人事異動によって慣れない職場に配置転換され、ノイローゼ気味でした。家庭での口数も減り、妻と話すときは離婚話。夫婦仲も大きく崩れていきました。

この家では玄関が入ってすぐ右横に客間がありました。そこが父親の寝室として使われていました。また母親の寝室は1階リビングの奥にあり、父親とは別でした。

子ども部屋は2階でしたが、玄関から短い廊下を通ればすぐに2階へ行くことができました。

上げました。

いずれも、その手口や犯行の残忍さ、また犯罪の低年齢化という側面を含め、社会的に大きな衝撃をもたらした事件です。一つひとつの事件を調べていくと、犯人にいくつもの共通項目が浮かんできます。例えば夫婦仲が非常に悪い、甘やかされてきたといった具合です。

その共通項の一つにあったのが家の間取りでした。家族関係がバラバラになる、あるいは子どもが孤立してしまうような間取りだっただけでなく、子どもが長期間にわたって他人を監禁していたのにもかかわらず、それに親が気づかなかつたという実態も浮かび上がりました。

## 宮崎勤の育った家は家族の関係性が解離する配置だった

起きた事件とその間取りの説明を簡単にして頂けま

玄関からみてキッチンが一番奥の部屋にあり、流し台も壁に向かっていて、ダイニングに背を向けるような構造です。

家族のコミュニケーションが生まれにくい間取りでした。

ちなみにこの次男はメッセンジャーボーイの役割もしていたそうです。口をきかない父親と母親。双方の手紙による連絡を彼が取りついでいました。

ある日、父親のキャッシュカードを盗んで使おうとしたことがわかり、父親から説教をくらいました。普段なら母親がかばってくれるのですが、この日は母親も彼を叱咤しました。その夜に事件が起きたのでした。

また「女子高生コンクリート詰め殺害事件」の主犯各が暮らしていた間取りをみると、ピアノ教師を仕事場として使っており、大きなランドピアノが置いて

すでしょうか。

本書で記した冒頭の3事例を紹介しましょう。

まず「宮崎勤・連続少女誘拐殺人事件」(1989年)は1988年から89年にかけて宮崎勤が4人の少女を誘拐、殺害した事件です。遺体をビデオカメラで撮影したりするなどの残忍な行為も衝撃的でした。精神鑑定も受け、責任能力が争点となりましたが、2008年に死刑が執行されています。

宮崎は長男。仕事が忙しい両親に代わって祖父に愛情を注がれて育ち、かつ子守り役の男性がいました。事件は最愛の祖父が死んだ1988年以降に起きています。

宮崎は昭和20年頃に建てられた戦前の家で育ちました。

間取りは当時一般的だった「田の字型」でしたが、宮崎は学業が期待されていたため小学校低学年から独立した部屋を与えられていた。

その他の事件の詳細や間取りは本書に譲りますが、子どもの孤立を許す間取りであった点では共通しています。

## 子ども部屋は2〜3畳あれば十分

「新潟少女監禁事件」(2000年)では両親に溺愛された被告が将来的な2世帯住宅を考えて増築がなされ、入る階段も別で、その2階に被告の部屋がありました。少女が監禁されていたのもこの部屋です。家族も立ち入りが禁止されていました。これを「充実し過ぎた子ども部屋による自立失敗型」と分類していますね。

私は「脱nLDK」を主張していますが、子ども部